

27T-pm01

日本における薬剤師の地域偏在 18 年間 (1996~2014 年) の動向

○安藤 崇仁¹, 井上 和男² (¹帝京大薬, ²帝京大ちば総合医療セ)

【目的】規制緩和による薬学部新設や薬学教育 6 年制への転換期を含む 18 年間 (1996-2014) における薬剤師の地域分布の動向を人口および地理的指標により分析したので報告する。【方法】1996 年、2004 年、2014 年の 3 時点における薬剤師の市町村分布を評価した。3 時点の薬剤師数は 2 年毎の薬剤師調査を用い、薬剤師全体および勤務施設 (薬局、病院) 毎に抽出した。薬剤師分布の指標として薬剤師数対人口比を算出し、分布の様相は Lorentz 曲線および Gini 係数により評価した。へき地性を示す地理的指標には各市町村の役場等所在地から都道府県庁までの交通距離を用いた。市町村合併については 2014 年時点の市町村として遡及して処理した。【結果】薬剤師総数は 1996 年で 194300 人、2004 年で 241369 人、2014 年で 288142 人であり、1996 年を基準とすると 2004 年で 24.2%、2014 年で 48.3%増加していた。この増加は薬局でより顕著であり 2004 年で 66.5%、2014 年で 130.7%増加していた。一方、病院では 2004 年に 1.82%減少、2014 年に 12.0%増加していた。各指標から求めた Gini 係数は、いずれも若干増加しており地域偏在が持続かつ若干悪化していた。薬剤師数の変動は人口が多い地域や極端に少ない地域では少なく、中間層では相対的に大きな増加が認められた。【考察】日本では国民皆保険制度により、地域の区別なく医療サービスを受けられるが、そのためには医療資源へのアクセスが確保されている必要がある。しかし、本研究から薬剤師の地域偏在が持続しており、医療サービスに地域格差があることがわかった。本研究の結果から、都市部の薬剤師は飽和状態となりつつあると考えられた。また中間層地域において薬剤師数の増加は著明であった。しかし、へき地では薬剤師の流入が少なく相対的不足にあり、具体的な薬剤師へき地医療政策が必要であると考えられる。